

実習報告（関係機関実習）

生徒の主体性を育む総合的な学習を推進するための協働づくり

阿世賀 砂織（教育経営探究コース：現職教員）

1 探究実習のテーマと設定の理由

現任校においては、今年度から新学習指導要領の実施に伴い、学習評価の進め方を課題と考えている教員が多く喫緊の問題となっている。また、教員同士の連携不足があり、評価等で考え方の共有ができていない面もある。さらに生徒については、自己有用感を感じる場が少なく、主体的な活動も少ないことが課題となっている。

そこで以上の事から、大学院2年間の研究テーマを「新学習指導要領に対応したカリキュラム・マネジメントを推進する教員の協働づくり」とし、課題解決を図りたいと考えた。新学習指導要領に応じた指導をするなかで、現場の教員からは「指導方法や評価方法について、教科内での教員間の共通理解が図れない」や「新しい評価方法にあう生徒の主体性を引き出す授業の工夫が必要だし、自分が出す評価も正しいのかどうか不安だが相談できない」といった声も聞かれ、カリキュラム・マネジメントが求められている。まずは、総合的な学習の時間を活用して、カリキュラム・マネジメントの考え方を取り入れて、教員間で協働して取り組む時間を設定する。そうすることで、教員と生徒が課題を共有し、解決していこうとする中で指導方法と評価の在り方を検討し合う機会が生まれ、連携することのメリットを感じることができると考えた。また、このような学習や生徒会活動に積極的に取り組むことで、生徒の主体的な活動が増え、自己有用感を感じるようになり、不登校の未然防止にもつながるのではないかと考え、その方法を探るために、探究実習のテーマとして「生徒の主体性を育む総合的な学習を推進するための協働づくり」と設定した。

2 探究実習の研究目標

佐賀市教育委員会、東部教育事務所の実習においては、各担当者との意見交換や聞き取り、資料調査、学校訪問を通して、研究テーマである「生徒の主体性を育む総合的な学習を推進するための協働づくり」のための体制づくりや方策について考察する。また、管内の小中学校の若手教員支援や初任研授業参観、研修に同行し、若手の育成や各学校の新学習指導要領に対応したカリキュラム・マネジメントや評価についての課題や取り組み方を学ぶ。

3 探究実習の概要

関係機関実習は、佐賀市教育委員会と東部教育事務所の2か所で10日間ずつ実習を行った。

佐賀市教育委員会では、佐賀市教科等研究会生活科総合的な学習の時間部会夏季研修会や早稲田大学出前講座研修会に同行して、カリキュラム・マネジメントや新学習指導要領に沿った学習評価の在り方について学ぶことができた。

東部教育事務所では、管内の小中学校の学校訪問や初任者授業研究会に同行して、中学校では教科の枠を越えた授業づくりの方法、小学校では立場を越えた職員で協力して授業を作りあげていく教員の協働の様子を学ぶことができた。

4 探究実習の成果と課題

(1) 「生徒の主体性を育む総合的な学習を推進するための協働づくり」のための体制づくりや方策について

SDGs への取り組みや総合的な学習の時間に関するカリキュラム・マネジメントの実践事例を見ることができた。特に SDGs に関しては「新しく追加される」イメージが強く、現任校では取り入れることに消極的になりがちであった。しかし、取り立てて新しい何かをするというよりも、現在までに学校現場で行った様々な教育活動の取り組みを、SDGs の視点やカリキュラム・マネジメントの視点から捉えなおして、「意識化する」ことで解決することも分かった。事例で挙げられた学校では、教科の年間計画に SDGs とのかかわりを可視化し、授業を通して関連を意識できるように SDGs のカードを黒板に掲示して授業をする取り組みを行っていた。そうすることで、他の教科との関連を実感することができるようになっていた。また、校内にも SDGs に関連する掲示物を掲示することで、自分たちが学んだことやどのように生活と結びついているのか、自分たちに何ができるのかを考える取り組みがなされていた。このような取り組みを進めていくためには、各教科の年間計画と身に付けさせたい資質・能力を可視化し、地域の物的資源と人的資源の可視化と共有化を行い、全職員での共通理解を図っていくような校内研究を活用した取組にしていくといいと分かった。

(2) 新学習指導要領に対応したカリキュラム・マネジメントや評価

カリキュラム・マネジメントを行う際には、学校の教育目標に対して、各教科・領域でどのような資質・能力を身に付けさせることができるのか、ということをそれぞれ可視化していくことの重要性を認識できたことがあげられる。そのためには、教育目標や校内研究の研究テーマで示されている語句の意味やイメージを、全職員が共通理解することが求められる。そうすることで、指導と評価に関して学校全体の共通理解が図られていく。また、全教科で評価の視点が統一されているので、これを活用して、学校全体のカリキュラム・マネジメントを行う手掛かりとなり得るのではないかと感じた。特に評価の「学びに向かう力、人間性等」に関する評価に関して、目指す生徒像と身に付けさせたい資質・能力との関連性が求められ、職員で共通理解していくことが「職員の協働づくり」に繋がると、校内研究の講話や指導助言を聞いていて分かった。A 中学校では、同教科・異教科で「授業チーム」を編成し、意見交換やアイデアの共有を行い、幅広い指導方法を学びそれぞれの授業に生かす活動をしていた。この活動で、「課題の設定」「発問の工夫」「生徒の活動のさせ方」「評価の仕方・見取り方」など他教科や他の教員のいいアイデアを知る機会となる。職員の協働を作るためには、教科の枠を越えて同じ目標に向かって活動することが求められるが、中学校では各教科の意識をどのように統一していくか、ということが課題となる。しかしこの取り組みをしていくと、他教科での工夫やアイデアをお互いが参考にしながら授業づくりが行え、評価の見取り方や基準もそろって、統一したものが出来上がっていくのではないかと感じた。

5 次年度の学校変革試行実習にむけて

カリキュラム・マネジメントを推進する教員の協働づくりを行うには、学校が生徒に身に付けさせたい資質・能力は何であるかを、もっと具体化し教員が共通理解していくことが必要である。そのために、教員が教科の枠を越えた活動を組織としてどのように整えていくのか、教員同士がどのような資質・能力を身に付けさせたいのか、そのためにどのような学習指導と学習評価を行っているのかを話し合う場をどのようにして設定していくのかを検討していく必要がある。来年度は授業づくりを通じた教員間の協働づくりに焦点をあてた活動について探究していきたい。